香港便り その7

アジア人がアジア人を踊る。香港版くるみ割り人形

文 高野 陽年 text by Yonen Takano

今まで僕が行ってきた舞台メイクといえば鼻筋を強調し、目を大きく見せるために輪郭を描いて、周りの西欧人のダンサーに少しでも溶け込めるように、自分の顔に色を加えていた。しかし今回の舞台は違う。

音楽はなじみのあるチャイコフスキーのくるみ割り人形。これまでのダンサー生活の中で何百回と踊ってきた。一幕のパーティーシーンは音符の隅々まで把握している。普段ならばヨーロッパのアッパークラスの設定で、僕はウィッグをつけてドイツ人の何某のふりをしていただろう。けれども今日の役は髪の毛を七三分けにセットした近代中国の父、孫文だ。

香港バレエの芸術監督であるセプティム・ウェバーが演出し、今シーズン発表したくるみ割り人形は実にユニークである。ホフマンによるくるみ割り人形の舞台をドイツから20世紀初頭の香港に移したのだ。当時の香港はイギリス領で現在の国際色豊かな都市の礎が作られ、そして伝統的中華文化が今よりも色濃く残っていた時期だ。一幕のパーティーは香港島にいまだに立派にそびえたつ洋館で行われ、主人公を怖がらせるネズミはかつて香港で暴れまわった海賊たち。香港競馬の騎手やトラ、飲茶、竹林などが登場し、ローカルにはなじみ深く、ビジターには香港の魅力が伝わるような舞台設定である。

くるみ割り人形、ひいてはバレエはヨーロッパの文化である。僕がアジア人だからという理由でかつて在籍していたロシアのバレエ団時代に中国の踊りに起用され続けたのは納得がいかないわけでもなかったが、人種で役柄が固定されるのは悔しくもあった。しかし同時に日本やアジアのバレエ団が金髪のカツラをつけて西欧人を演じるのも違和感があった。西欧人が髷を結って袴をはいて時代劇の侍を演じているようなものだろう。

香港バレエはヨーロッパのバレエを真似することだけが正当なバレエであるという考えを捨て去り、アジアのバレエ団として古典バレエを再構築したのである。くるみ割り人形はヨーロッパのクリスマスを伝える西洋文化の模倣ではなくて、家族や親しい友人らとともに大切な時間を過ごすクリスマス精神を香港の人々に伝える機会なのだ。

香港にはさまざまな人種がいる。そして香港バレエもしかりだ。その事実を反映するかのようにセプティム版くるみ割り人形には西欧人もアジア人も役として登場する。アジア人としてアジア人の役を古典バレエの中で踊るということは今までにない経験であった。香港オリジナル作品を作り、香港の魅力を内外に発信するだけではなく、セプティム版は多様性がうたわれる現代社会に適合した一つの模範解答なのかもしれない。

The Nutcracker | Dancers (from left): Kent Eguchi, Wang Zi, Kan Ka Kit Jordan, Yonen Takano, Zhang Xuening, Lin Chang-yuan Kyle, Henry Seldon, Leung Chunlong | Photography: Keith Hiro | Courtesy of Hong Kong Ballet

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。